

タイトル：2012 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art

日時：2012年12月1日（土）14:30～19:50

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies, 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut Central District

The History of the Arab Community Center for Economic and Social Services: Living as “Arab Americans” in America before and after 9/11

貫井 万里（早稲田大学イスラーム地域研究機構）

### 報告内容

2001年9月11日に米国同時多発テロ事件が発生すると、米国内でアラブ系移民やムスリムに対するヘイトクライムが急増した。ブッシュ政権は、ヘイトクライムを防止し、「テロとの戦い」を円滑に実施するために、「良いアラブ」対「悪いアラブ」及び「良いムスリム」対「悪いムスリム」の二項対立的な概念に基づく政策を展開し、10月に愛国者法を制定した。アメリカ政府に協力的なアラブ系アメリカ人やムスリムは「テロとの戦い」の同盟者であり、正しいアメリカ市民と称揚され、ヘイトクライムから守るべき市民と定義づけられる一方で、疑わしいアラブ系アメリカ人やムスリムはテロ容疑者と断定され、愛国者法によって令状なしで逮捕、国外追放に処された。本発表では、アラブ・コミュニティ経済福祉センター（The Arab Community Center for Economic and Social Services 以後 ACCESS と略称）というアラブ系アメリカ人の世俗的な非営利組織に焦点をあてて、第一にアラブ系アメリカ人コミュニティと ACCESS の歴史を、第二に 9.11 事件以後の ACCESS の活動について報告した。結論として、ACCESS は、政府によって「テロリスト」のレッテルを貼られ、国外追放されかねない貧しい移民たちを保護し、彼らを「良きアメリカ市民」に育成することで、アラブ系アメリカ人全体に悪影響を及ぼす「テロリスト＝アラブ」のスティグマの解消に努めるなど、ブッシュ政権の「良いアラブ」対「悪いアラブ」政策に戦略的に対応して活動を展開している点を提示した。

### 報告に対するコメント

本報告に対し、ノートルダム大学レバノン移民研究センター所長のギーター・ホウラーニー教授（Prof. Guita Hourani, Director of Lebanese Emigration Research Center of Notre Dame University-Louaizé, Lebanon）より、詳細なコメントを頂いた。第一に、アラブ系アメリカ人コミュニティの中でも特に活動的な ACCESS の、9.11 事件前後の対アラブ差別に対する戦略という重要な研究テーマに取り組んでいる点と結論部分を評価頂いた。第二に、理論的な枠組みに欠け、これまでの移民研究の提示した課題に十分に触れていないため、同報告の方向性が見えてこないという問題点を指摘された。第三に、ACCESS のリーダーとのインタビューや年報等の精査をさらに実施することの必要性を示唆された。第四に、今後の研究として、ADC（American-Arab Anti-Discrimination Committee）や AAI（The Arab American Institute）な

ど他のアラブ系アメリカ人団体と ACCESS を比較検討することを提案された。ギター先生からのコメントは、本報告の発展のために非常に建設的なご意見であり、今後さらなるデータ収集と先行研究の考察の必要性を改めて認識させられた。

### **報告会参加の感想**

レバノン情勢が不安定な中、黒木英充教授を始めとする東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の先生方及びスタッフの慎重なご判断と手厚いサポートのおかげで、無事、ベイルートで報告会が開催され、報告者として参加させて頂けたことに心から感謝しております。報告会は、若手研究者一人一人の報告に対し、海外の専門家のコメンテーターがつき、中東研究日本センターの自由な雰囲気の中で、心行くまで議論できるという非常に素晴らしい内容でした。プログラムの随所に、若手研究者育成のための配慮と工夫がこらされており、とても印象的でした。何よりも、レバノンという中東の中でも非常に複雑な歴史を持つ国に実際に行き、専門の先生方のお話を伺い、同輩と議論しながら、レバノンの風景の中でその歴史や社会、文化、政治の一端を実体験できたことが何にもまして忘れられない貴重な経験となりました。ありがとうございました。